

「華人」に皆さんは、どんなイメージを重ねるだろうか？ 横浜や神戸には、整備された中華街とおいしい中華料理があり、日本にいながら華麗な中華世界を垣間見ることができる。歴史に興味があれば、19世紀の後半以降、裸一貫で飛び出した男たちが、海外で労働者となり、苦勞したことをご存知かもしれない。彼らの中には、その後商売などで成功し、故郷に錦を飾った人や、現地国家の経済の中樞を掌握した人もいる。20世紀前半には、抗日戦争や、新中国建設のための革命に支援をする人も出た。1980年代に入って、中国が経済の改革開放を本格化させてからは、高い学力と経済力を兼ね備えた新世代の移民が、世界経済のけん引役として活躍するようになった。

しかし、こうした成功した「華人」は、実は移民のうちのほんの一握りでしかない。彼らの陰には、現地女性と結婚し、現地の文化や言語を自然に取り入れ、その社会に溶け込んでいった多くの人々がいる。彼らは、「中国系移民」やその子孫であるが、いつの間にか自らを中国系と意識する「華人」ではなくなっていった。本特集では、読者になじみの「華人」の姿だけではなく、現地の人々との交流の中で土着化していった中国系移民の末裔の姿を紹介したい。

この特集は、平成15年度から19年度にかけて行われた共同研究プロジェクト「中国系移民の土着化／クレオール化／華人化の人類学的研究」の成果である。特集の中では、移住後も主に文化的な意味で中国系としての意識を維持している人を「華人」とし、かつての「華僑」もこの中に含めた。また、「華人」としての意識を失い、移住先の社会に溶け込んだ人も含めた総称として、「中国系移民」という用語を使った。

責任編集 **三尾裕子**

# フュージョンする

1 澄漢宮の「龍飛」という年号の入った碑文。



## ドラゴンが飛んで行った 現地社会へ溶け込んだ中国系移民

三尾裕子  
みお ゆうこ / AA 研

「『龍飛歳次癸卯年』の碑文って、あの『龍飛』？」私は、ベトナム中部の町ホイアンの「澄漢宮」という廟で、「龍飛」という年号のついた碑文（写真1）を見つけた時、「ついにかつて読んだことのある陳荊和先生の論文の中にあつた『龍飛』の実物を見た！」と心躍ると

同時に「これじゃ、西暦何年かわからない」という困惑にぶつかった。

海外の中国系移民が神を祀っている廟や、彼らの集まる場所としての会館の多くには、その縁起を記した石碑や、建立祝いや改築祝いなどに贈られる扁額（横額）が残されており、それらには、中国の年号が記されている。ホイアンでは、複数の会館に残されている碑文や横額の多くに、皇帝名を冠した年号（例えば、「光緒庚子」；写真2）が記載されていて、西暦年への換算も簡単だ。つまり、中国系移民やその子孫の多くは、長らく、海外に居住しつつも故郷の政府の定める時間の枠組みに従ってきた。その感覚は、あまり意識していないとし



ても、今日の私たちが、日本の時間の枠組みに従って「平成×年」という年号を使っていることとほぼ同じことだ。

そこで、問題なのは、「光緒帝」は存在しても、少なくとも17世紀以降、「龍飛帝」が中国の正史の中に登場したことはない点だ。ベトナムにも同名の皇帝は見つからない。そうすると、当該碑文の作者は、中国でもベトナムでもない別種の政治的権威への帰属意識を持っていたと考えざるを得ない。

では、いったいその権威とは何か。その一つの答えが、上述の陳先生が提起した次の解釈だ。すなわち、「龍飛」は、明（1368～1644年）が清（1644～1912年）に打倒された時、いつの日か明を復興させることを夢見て、一時的に東南アジアに避難した明朝の遺臣が使用した年号だ、というものだ。だから、彼らは、滅亡した明の皇帝の代わりに、「龍飛」という皇帝とその年号を発明した、というのである。冒頭で「困惑

3 マラッカ「青雲亭」内にある「龍飛」の年号の入った碑文。



2 ホイアンの福建会館の額。



# 中国系移民

した」と述べたのは、架空の年号では、碑文の西暦年を確定させることができないためである。しかも、興味深いのは、「龍飛」は、ホイアンだけではなく、南部のホーチミン市や、マレーシアのマラッカ（写真3）、インドネシアのバタヴィア（現在のジャカルタ）にもあったという。また、「龍飛」以外に「龍集」（写真4）などの年号も使われた。つまり、同志は、東南アジアの各地に散在しながらも、「龍飛」「龍集」を旗印にして、明の遺臣として巻き返しの日の到来を念じあっていた、というわけだ。

こう考えてみると、義に篤い人たちの気概に触れたような気がして、彼らのその後が知りたくなる。散らばった人たち同士は、どうやって連絡を取り合い、同志であることを確認したのか、密かに示し合わせて決起しなかったのか、その後、彼らの志は受け継がれ、近代の中国革命における海外の中国系の支援となって結実したのか……。

4 ホーチミン市の「明郷嘉誠堂」内にある「龍集」の年号の入った額。



ところが、その答えは、上記の想像とは異なることになった。冒頭で紹介した廟は、華人の廟ではなく、ベトナム人になることを選択し、ベトナムの阮朝（1802～1945年）によって「明郷」と分類された中国系移民の末裔のための廟となった。明の遺臣やその子孫たちは、おそらく、時間が経つにつれ、明の復興が実現困難だと感じたのか、ベトナムの風俗習慣、言語を受け入れ、多くの人材がベトナムの科挙を通して、官吏に登用された。また、19世紀後半以降の大量の中国系移民の中にも、現

5 漢字が読めなくなった「明郷」の祖先祭祀のための祭壇。位牌がベトナム語表記になっている。



地に定着し明郷になることを選択した人が増え、もともとの明の遺臣の子孫のほうが絶対的少数になってしまった。明郷の子孫は、中国出身であるという歴史伝承を伝えていても、文化的にはベトナムの影響を強く受けている（写真5）。私が彼らに「龍飛」や「龍集」の由来を尋ねても、陳先生の解釈を知っている人は殆どいなかった。むしろ、中国の歴史とは関係のない解釈が聞かれることもあった。

こうして、「龍飛」の謎は解き明かされぬまま闇に消えようとしている。「龍

は中国の皇帝の象徴なので、「龍飛」や「龍集」は、海外に飛んだ亡命皇帝や義士たちの雲の上での集結を暗示しているようでもある。しかし、ホイアンでは、彼らは結局、「龍飛」「龍集」の由来伝承とともに、華人としての意識を手放した。マラッカでも、「ババ・チャイニーズ」と呼ばれる人々が現地化し、中国とマレーの文化を融合させた独特な文化を生み出した。「龍飛」の魂は、はるかかなたに飛び立って、子孫たちの中には、現地社会に融合した魂が育まれたのである。